新しい部活のカタチ、新しいDANCEのカタチ＝ダンス部の「今」

文＝石原 久佳

ストリートダンス人気が発火点

気がつけばダンス部が元気だ。

校内で響くダンスミュージックの「音」、くり返されるステップの「振動」、動きに合わせて飛ぶ指導の「声」、頬をつたい床へ落ちる「汗」、動きをモノにしようと食らいつく「目線」、仲間と共鳴しこぼれ落ちる満面の「笑顔」。ダンス部の存在がいま全国の中学高校を元気にしている。

ダンス部はもはや花形の部活だという。都立高校では女子の部員数が吹奏楽部を抜き1位、文化祭やコンテストや学外での活動も年々盛り上がり、強豪校にはダンス部目当てで生徒が入学してくるそうだ。

その背景を探ってみると、まずはダンスミュージックやストリートダンスの定着がある。かつてクラブカルチャーであったヒップホップダンスが、今の若者の目には一般的なエンターテインメントとして映る。そして、フィットネス系ダンスや習い事としてのキッズダンスのブーム。まさに大人顔負けのダンスを身につけたキッズダンス第一世代が今、高校生になっている。さらに、2012年からの中学校での武道・ダンスの必修化という追い風。

気がつけば、ダンス部を抱える中学高校は全国で2,000校、部員平均30名だとして60,000人の「部活ダンサー」が日本には存在することになる。もちろんこんな国は日本以外にない。昔から創作ダンスやモダンジャズを主体とするダンス部はあったわけだが、今のダンス部はヒップホップなどのストリートダンスが主流（全体の7～8割を占める）。前述のエンターテインメントとしての人気が今のダンス部の盛り上がりを形作っていることは間違いないだろう。

女子を中心に初心者の入部がほとんど

キッズダンスに象徴されるように、日本のダンス入門者は若年化しているのだが、ダンス部には初心者として入部してくる生徒が7割を占めている。女子は全体の9割を越え、まさに女子の花園。他の競技では高校入学から新しく始めるパターンはそれほどないが、それだけダンスの敷居が低くなり、「憧れ」の対象になっているということだろう。

「中学は体育会系だったけど、高校に入ったら絶対ダンス部って決めてた！（高三女子）」

「ダンススクールに見学に行ったけど、キッズがうますぎて入りにくかったから…（高一女子）」

「遊んだりバイトするよりも、今しかできないことを三年間やろうって決めてました（高二女子）」

ダンス部員に話を聞くと、みんなそういった「熱」を持ってダンス部に入っている。もしかしたら、普通の学生より「目立つタイプ」の彼女たちは、昔だったらギャルに象徴されるような、学外で羽を伸ばすタイプだったのかもしれない。物欲から離れ、スマホに熱中し、より現実志向になっていると言われる最近の若者だが、ひとつのステップをモノにするために、アナログなスキルを身につけるために、日々の時間と情熱を費やすダンス部員の姿は本来の若者らしさを取り戻しているとも言えるだろう。

また、ダンス部に入る生徒の多くは根っからのダンス好き・音楽好きではない。いわゆる一般的な感覚と興味を持った若者である。ダンス界の人間にとっては、ストリートカルチャーへの理解も求めたいだろうが、そこはキッズダンス同様、難しい問題である。あくまでスポーツ、あくまで部活としてのダンス。ダンス部は「新しいダンスのカタチ」なのだ。同じく学校に導入されている武道が、日本古来の武士道の教えを抑えてスポーツ化されているのだから。

ダンスで培われる協調性・自主性・創造性

ダンスという競技は、これといった数値や基準がないものだ。だから、正解がないと言えばそうなのだが、実際のコンテストでは優劣がつけられるし、本当にうまいダンス、面白いダンスは素人目に見ても一目瞭然だ。ダンスはいわばフィギュアスケートと同様、軸がしっかりしている、動きが揃っているなどの身体的・技術的な側面と、観客の感性を刺激する芸術的な側面が同居する競技である。だからこそダンス部員に必要とされるのが、創造性。どんな音楽で、どんな衣装で、どんな振り付けで、どんなテーマで……正解の決まっていない正解を探ることは、ダンス部の活動でしか得る事のできない創造性やバランス感覚を育むだろう。

また、多くのダンス部の顧問の話で「いちばん大事にしている」というのが生徒たちの協調性と自主性だ。部活ダンスはチーム競技であるために、まずは何よりチームワークが大事。部員のスキルのばらつきを整え、チームとして最高の演技を生み出すには、まずはお互いを信頼・尊敬し合うこと、それは普段の部活動の中で築きあげていくしかない。息が揃えば、気持ちが揃えば、ダンスは揃っていく。足りないスキルをチームワークと気持ちで補う。それはステージから審査員や観客に「見えないファクター」として伝わっていく。ダンス部の「日々」から「勝負」のステージへ――この過程で生まれる感動こそが部活ダンスの最大の魅力ではないだろうか。

ダンス部が抱える「3ナイ」問題

練習環境・部費・指導者の3つがナイ。

何もダンス部に限ったことではないが、新興の部活故になかなかすぐには恵まれた環境が整わないようだ。まずは、練習環境。鏡付きの専用ホールがあるダンス部なんて稀だろう。ある時は体育館の片隅に移動鏡を運んで、ある時は渡り廊下で窓ガラスに映して、ある時は剣道場、ある時は教室で、運動場で、校舎の影で……とダンス部はまるでヤドカリ状態で練習場所を探し続けている。ダンスはとにかくカタチのチェックが大事だから、鏡がないのは何より厳しいのだという。

部費に関しては他の部も同様だろうが、コンテスト用の衣装は材料費がピンキリになるため、足りない分は個人（保護者）負担となる場合が多い。部員も多いため大会でのエントリー費や移動費もかかる。加えて、練習着・シューズ代、練習場代、合宿代などなど、カラダひとつできるダンスと思いきや、それなりの出費だ。部費の部分では、外部指導者への謝礼も同じく。しかし、それは生徒の自主性の育成と微妙に関わっていく問題でもある。ダンス部は顧問が経験者であることが少なく、指導に関しては経験のある生徒を中心に行なうことが多い。「先生役」となった生徒を中心に、皆で練習や振り付けを考え、それなりの成果や結果が生まれる。自分たちが考え、行動し、責任を持ち、勝負し、結果を受け止める。まさに「学校でのダンス活動」の意義がそこにある。とは言え、生徒たちは大会での入賞＝高い結果を求めているのも事実。高い結果を得るための練習法や振り付けを求めるならば、外部から指導者を招く方が合理的だろうが、現状では、どちらのやり方でも成果を上げている学校があるために、そこは学校や顧問の考え方や状況によるところだ。筆者が取材した中では、ダンス部のOB・OGが臨時で指導にあたる形が、伝統と自主性を重んじるダンス部にとって良いやり方のように思われる。

とは言え、ダンス部の時代はまだ始まったばかり。今のダンス部の「元気」が続いていけば、指導の形もダンス部の形もこれからさまざまな変化を見せていくだろう。